

石門心學の發生について : 町人囊と都鄙問答との思想的關聯

西尾, 陽太郎

<https://doi.org/10.15017/2335371>

出版情報 : 史淵. 50, pp.27-35, 1951-12-28. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

石門心學の發生について

——町人囊と都鄙問答との思想的關聯——

西尾陽太郎

石門心學の發生については既に諸家の所見の發表されてゐるものが多く今更に蛇足を加ふる要を見ないかの如くであるけれども、私見によればこの問題についてはいさゝか従來の見方とは立場を異にした方面から考察を加へて見る必要のある事を感じる。結論を先に云ふならば石門心學發生の先驅的な形態の一つとして西川如見の町人囊の如きを考へ、これと梅巖の都鄙問答における思想的傾向とを關聯せしめることによつて、心學と稱せられる近世思想上の現象の發生がより自然なものとして理解し得ることになるのではないかと考へるのである。といふのは、従來石門心學の發生について説かれてゐる事が心學の本質といふ點から見て或は一面的な單なる思想系統史的なものに終つてゐるために決定的な結論を得ることが出來ずゐたのではなかつたかと思ふ。心學とは町人階級の教學であつて、いはゞ町人によつて町人のために説かれた町人の學問とも云ふべきところに心學の心學たる所以が考へられるのでなければならぬ。この事は梅巖が都鄙問答に「我教ふる所は商人に商人の道ある事を教ふるなり。全く士農工のことを教ふるに非ず」といつてゐる事にもうかゞはれ、たとへそれが單に商人のみに通用する道ではなく、更に廣く當時の一般の社會にとつての普遍性をもつことが梅巖によつて考へられてゐたとしても、元來心學の本質・目的が其處に置かれてゐたといふ事には變りはないのである。それ故に心學の研究もかゝる立場からその發生や普及狀態その他が考へられなければならないのであり、現にさうした研

究は例へば石川氏の場合の如き見事な成果を擧げて居られるけれども、その發生に關する考察に關する限り町人のための町人による教學としての發生の経路についてはやゝ具體性を欠き、そのために近世思想史の流れの中における老大なる心學の體系が突如として出現して來る感がするのを否定出來ないと思はれる。一時代の特異な思想體系の發生には(一)その時代にまで作用して來る過去からの既成的觀念形態と、(二)いはゆるその社會の下部構造に照應して生成して來る上部構造としての意識面のあり方が相關的に結合し、(三)それがその時代の特定の個人において表白されることによつて成立するといふ構造が考へられるのではなからうか。心學についても(一)に關しては大體二つの見方が存在する。一つは「心學」といふ語の起源をたづねそれを石門心學の源流とし、従つて石門心學の性格をもその既成源流思想によつて理解せんとするもの、他は石田梅巖の著書に見られる思想的諸要素を分析摘出して、それらの中の何れかの要素を以つて石門心學の本質的傾向とするものである。前者は例へば心學五倫書の近世初頭以來の流布に注目し、それが或は藤原惺窩または熊澤蕃山の見作なりとする解釋に立つて、石門心學の先驅的な形態をこれらの人々に求めんとする。後者によれば梅巖の思想の中に見られる神道・儒道・佛教・老莊等の思想の中何れかに心學と稱し得べきものを求め、それを以つて石門心學の根幹なりと主張する。即ち儒教の中においても梅巖のそれが朱子學的色彩を大きく有つと理解するものは、朱子學が當時一面心學ともいはれた事を以つて、石門心學の由來をこゝに求めんとする。これに對して梅巖に陽明學的言説を汲み取るものは同じく陽明學が心學とも稱せられた事によつて、石門心學は陽明學の系統なりとするものである。

それ故結局、以上二説何れも心學といふ一語にすがつてその發生の起源を求めようとするのであるけれども、このやうなゆき方が所謂石門心學の本質といふ點から考へて必しも適當であるとは云へない事は明かである。これに對して「石門心學史の研究」の大著を發表された石川氏は從來の説を綜合的に批判して、これらを何れもその一面をとらへてたものに過ぎないとし、梅巖の思想の根本は町人の人間としての眞のあり方、即ち人間の心性について梅巖自ら悟るところがあ

り、この悟りを教へるために神佛老等の思想形態が採り上げられてゐるに過ぎないとする。即ち神道は國民的民族的なあり方を説くために、また儒教は朱子學陽明學を問はず、更にまた孔子孟子等の原始儒教にせよ、人間の實踐道徳を説き明かすために採用される。更に宗教的立場からは佛教が採られ、宇宙論的形而上的立場からは老莊思想が採用されるに過ぎない。梅巖自身はこれら一切を學び通して更にまたそれらを通り抜けたところに人間の本性と人間のあり方といふものを説いて人間の生活に一つの安心を得させるのが目的であつた。心學といふ名稱は結局かゝる心性論を中心とした彼の教説に對して、彼の門人手島堵庵によつて附せられたものらしく思はれ、梅巖自身は自己の説を心學と稱したわけではなかつた。當時かゝる教説の傾向が一般に心學と稱せられてゐたために自然梅巖の教説も石田流の心學と稱せられるに至つたまでの事であるに過ぎないと石川氏は主張された。

二

確かに石川氏の考察はそれ以前の見方に比して一步をすゝめ、亦立場を變へての考察であつてその點心學の本質を把握してゐる。即ちその立場とは前述思想史形成の(三)の立場に重點を置いたものであると見る事が出来る。然しかゝる立場からする限り結局石門心學の發生の由因は梅巖自身以外に求めることは出来ないしその必要もないのであつて、それ故氏の叙述は専ら梅巖の思想體系といふものからはじめられて來てゐるわけである。其處には未だ前述の(二)の立場の考察が全然とはいへないが排除の状態にあるのではなからうか。梅巖の如き思想が突如として彼一個の悟りから産み出されるとして、其處に何らかの思想的發生の過程といふものが考へられないであらうか。即ち心學が町人による町人のための教説であるとするならば、この事は云ひかへれば町人階級の階級的乃至階級意識形態の成熟を示すものであり、思想的に云つて梅巖の心學の發生の原因はこの町人階級における自意識形成の過程の中にこそ求めることが出来るといはねばならぬ。梅巖は結局かゝる歴史的な流の中にあつてさうした階級的自意識を體系化した最初の人であり、その意味で石門心學

の教祖であるには違ひないが、さうした體系化の以前に多くの散漫な形における町人の意識の諸形態といふべきものが先驅的に散在してゐたであらうといふ事は考へる事が出来る。例へば商人として商業上の心得を説いたものゝ如きが先づ第一に考へられ、次には次第に町人としての階級的な自己意識、即ち近世の階級的に嚴格な社會の最下層に置かれた人間として身分的に制約をうけながら、しかも經濟上延いては社會上の實力において他の階級を凌ぐといふ關係に置かれた町人が、その封建的身分制約の中における自己のあり方を考へると同時に人間としての自覺をも何らかの形で表明しようとする意識にまで生長するに至り、そして最後に梅巖の如き思想の體系が町人自らの手によつてその觀念論的人生哲學的形態を整えて來るといふ事は極めて自然の事と考へられるのである。而して右の發生過程三段階の中第一の商人の實際的商業上の心得の如きは一應差置くとして、梅巖の思想體系に對する直接的な先驅的な形態即ちいはゞ心學とも稱せられるべき人生哲學的諸要素を既に含みつゝ、尙まだその形をとゞのえるに至つてゐない段階のものを町人階級の中に求めるとするならば、その一例として西川如見の町人叢の如きものが考へられるのである。勿論石川氏もこの如見を見落してゐるのではない。然しその評價は極めて消極的である。即ち梅巖以前西川如見の町人叢の如きが町人のための教へとして書かれてゐるが、町人叢の如きは單に町人に對して知足安分を説いてゐるに過ぎず未だ人間としての心性について説くところがなると云つてゐられる。これ亦一應はさう云ふ事が云へなくはないけれども、心性論が明確な形で説かれるか否かは、むしろ兩者に屬する時代の前後關係による町人階級に對する封建的既成觀念の浸潤影響の度合によるものと見るべきではあるまいか。即ち元祿町人としての如見と享保町人としての梅巖の相違であつて、梅巖における觀念論的な心性論の先驅的な形態乃至その萌芽といふべきものは如見においても全然見られぬのではない。例へば町人叢底拂の上に皇極經世書を引用して「人の神明は天地の神明也、人の自ら欺くは天地を欺くなり、慎まざらんや云々」といつてゐる如き、また「一身養性」を以つて人事の要語なりとしてゐる如きは、如見にあつてもさうした心性論的なものゝ存在した事を示してゐる。唯

それが彼の場合には知識的な面にとゞまつてゐるやうで、梅巖における如き自己内面的な要求を伴つて追求され體系化されてゐないだけの事である。

更にまた梅巖においても如見と同じく知足安分を説くことは彼の教説の大きな部分となつてゐるし、彼の後繼者たちにも最もよくうけつがれた石門心學の特徴的一面であつたのであつて、近世町人階級の教へである限りこのことは免がれることの出来ぬ宿命的なものであつた。それ故かゝる見方からすると、梅巖の云はんとする所をその體系的な心性論的構成の中から抜き出して見ると、案外等かの意味で如見の説いてゐる箇條と共通な項目が多いのである。例へば都鄙問答と町人養とを並べて見ると、「町人と正直」・「町人と學問」・「町人の利殖」・「節儉について」・「人間としての町人」・「町人の道德」・「心性の問題」・「神道に對する尊崇」・「町人と後生」・「町人の孝行」等の共通の項目が採り上げられてゐることが知られるし、道德や心性に關する問題が儒教を中心として神儒佛三教の思想によつて修飾されてゐる點も精粗の差はあるが同様のゆき方である。

三

然しながらこの事はこれらの共通の事項について必ずしも兩者の解釋が同じであることを意味しない。却つて其處に差異のある事が町人の意識の生成過程における時代差として意義を有つのである。如見が元祿期の長崎町人であつて當時の新しい學問即ち洋學殊に天文や世界情勢などについての教養の持主であつた事と、梅巖が享保期の農家出の京都町人であり、神道の信奉者であつたといふ兩人の環境の相違も考慮に入れるべき問題であるとしても、如見の方が町人意識としては未完成的なものを示しながら一面より啓蒙的・批判的・科學的であり、梅巖の方は反對に一面町人としての自覺から云へば進んだ點をより細かく體系つけてゐながら、他面、より封建的・道德的・觀念論的である事は、近世町人階級の初期的な意識形態から後期的なそれへの推移を示すと同時にその町人の自意識の成長が必しも直線的なものでなく、何等かの矛

としての自覺に立つ限りをして現實的な町人の實力によつて獲得された自己の社會的地位を自負する限り、またその町人のあり方は一面町人の世界にのみ限られ他からいやしまれるものであつてはならず、却つてそれは社會全般に對する自己存在の意義を強調しなければならぬとされる。云ひかへれば町人の商行爲は財貨を移轉する事によつて天下の用を達し、貨幣を流通せしめるところに商人の道があり、この商人の道は同時に聖賢の道にも協なふものとして考へられるのでなければならぬ。即ちこのことは同時に他のあらゆる町人の禮義・町人の義理、町人の孝などが新しく要求され、それらが町人特有の性格を有つと同時に普遍的な規範性—即ち人間一般の問題としての仁義禮智信—などにもつながるものとして説かれるに至るのである。たとえば町人に對して要求される「知足安分」は今や易に説かれる「謙」の原理を以つて解明される如く、其處に町人の自意識が今や普遍的な「道」としての成長を示すに至つて來るのである。

ところでかゝる如見における町人の自己意識の成長を見る時、梅巖の心學の思想も結局以上の如見の示した方向を更に押しすゝめて、さうした意識を三教或は四教の既成觀念を以つて體系化したものに他ならないといへるのである。心學の發生の最も根本的な動因は、だからこの點にあるとしなければならぬ。梅巖に至れば彼は商人の道を強調すると同時にその道はあるがまゝの天の道であり人の道であり得るとされる。彼の商人觀によれば「商人の賣買するは天下の相なり」であつて、利についても如見よりも積極的に「賣利を得るは商人の道」であり、それは武士の祿に比せられる。それ故彼は「利欲」といふ町人特有の概念を否定し、義と利を結合せしめることによつて其處に新しい商人道を見出してゐる。而してかゝる意識を體系つける思想的根據として彼は儒教の天命性理の概念を探り來つてゐるのであり、萬物あるがまゝの姿において道のあらはれであることを教へることによつて安心立命・知足安分を知らしめようとするのである。

四

以上の如く考へる時、如見から梅巖への道は一つの線において辿られてくる。即ちその線とは町人階級の自意識の生成

過程に他ならない。思想的に云つて梅巖の思想の成立を辿るには勿論從來の如く思想系統史的操作も梅巖自身における體系の解明も大切であるがそれだけでは十分でない。心學の本質を町人階級に發生した独自の教學として取扱ふ場合にはかゝる町人階級にとつて非本質的である所の既成觀念が梅巖に採り入れられてゐることを指示するだけでは意味がないのであつて、町人の階級の成熟によつてその本質的な意識が發生して來る過程そのものが同時に考へ併せられなければならない。もし外的既成觀念形態の梅巖における受容について云ふならば、むしろさうした既成觀念形態、即ち封建的な諸思想が近世新興階級の一人たる梅巖の思想に浸潤して彼の思想を完全に觀念論的・封建的なものに彩つてしまつたところに近世町人階級の思想的成長の脆弱性を見るべきであらう。この思想性の脆弱さは即ち彼等の社會的經濟的なあり方の弱さの反映とも見るべく、云ひかへれば享保の頃から以後の町人社會が元祿時代のそれよりも却つて封建的な制約によつて屈伏せられてゆく一面のあつたことを知るべきである。即ち吉宗が中興の英主と稱せられその改革が享保の改革として注目されてゐることによつても、その前後において町人階級に對する封建的克服の努力が大きな問題になつてゐるのを知るのであり、本來が封建社會への寄生的な性格に於て理解されてゐる吾國近世町人の經濟的・社會的發展の停滞そのものが、同時にその思想性に於ても早熟的な固定化乃至封建的思想としての體系化を示すに至つたと理解されるのである。如見から梅巖への推移の裏面にはやはり吉宗の教化政策・庶民教育等の存在が注目される。享保二年からの湯島聖堂仰高門東舍士庶入込みの公開講義・享保四年の高倉屋敷の講筵・儒學諸派の學者の登用・菅野彥兵衛の會輔堂設立援助・六諭衍義の頒布・寺小屋における諸法度五人組帳前書の教授等、かゝる空氣の中にあたかも如見から梅巖への過程が置かれてゐるのである。如見が町人囊を著したのは元祿五年で梅巖八才の時に當り、それが京都において印刷發行されたのは享保四年梅巖三十五才の時で、石田先生事蹟によると梅巖の思想的放浪の時代である。「先生三十五六才の頃まで性を知りりと定めたまゐしに何となく其性に疑ひおこり、これを正さんとてかなたこなたと師を求めたまへど云々」といはれる頃に當る。こ

の享保四年に如見は江戸に上り吉宗に洋書を講じたといはれる。その途中三年に京都に立寄り書籍商と會談中この書が話題となり書籍商の懇望するところとなつて翌年これが刊行を見たのである。梅巖が京都に講舎を開いたのはこれから十年後の享保十四年の事であつた。この事は必しも如見の梅巖に對する直接的な關係を云はうとするものではないが、如見の終るところから梅巖が出發した思想的關係が年代的にも密接なものゝある事に注目するのである。

最後に町人囊の叙述の體裁は、彼如見を中心として諸人との會話の覺書の形式になつてゐる。其處にこの書が單に如見一人の思想から成立するものでなく如見をめぐる多くの元祿町人の姿が隱見してゐるのであり。かゝる點から元祿町人の意識面については、吾々は町人囊から更に西鶴や近松の如き元祿文學に示されてゐるものにまで溯り得るのである。町人の自意識の思想的形成過程として見た場合の石門心學の系譜はかゝる一環においてこそ最も本質的な一線を辿ることが出来るであらう。

(一九五〇、六、二)